

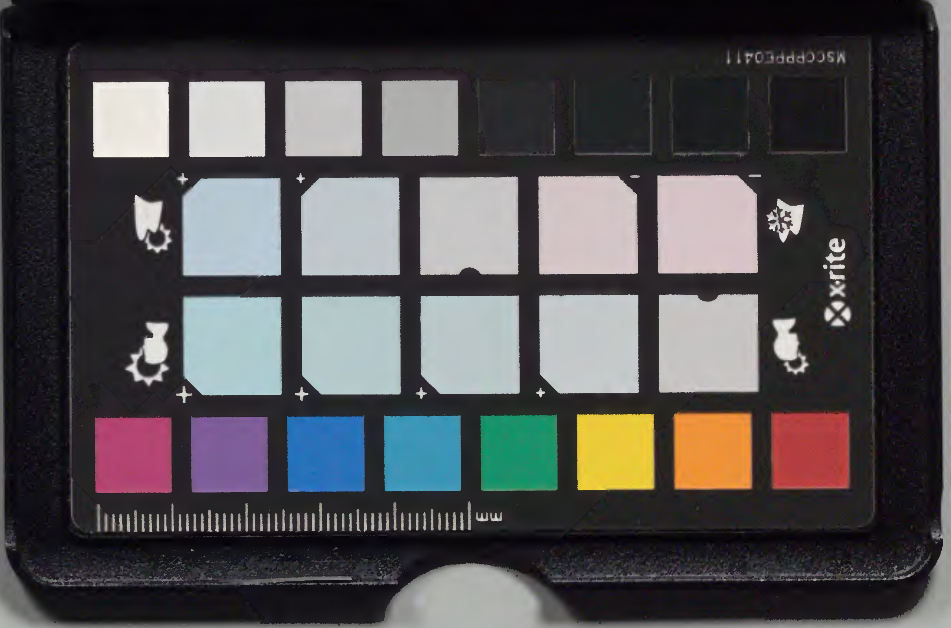
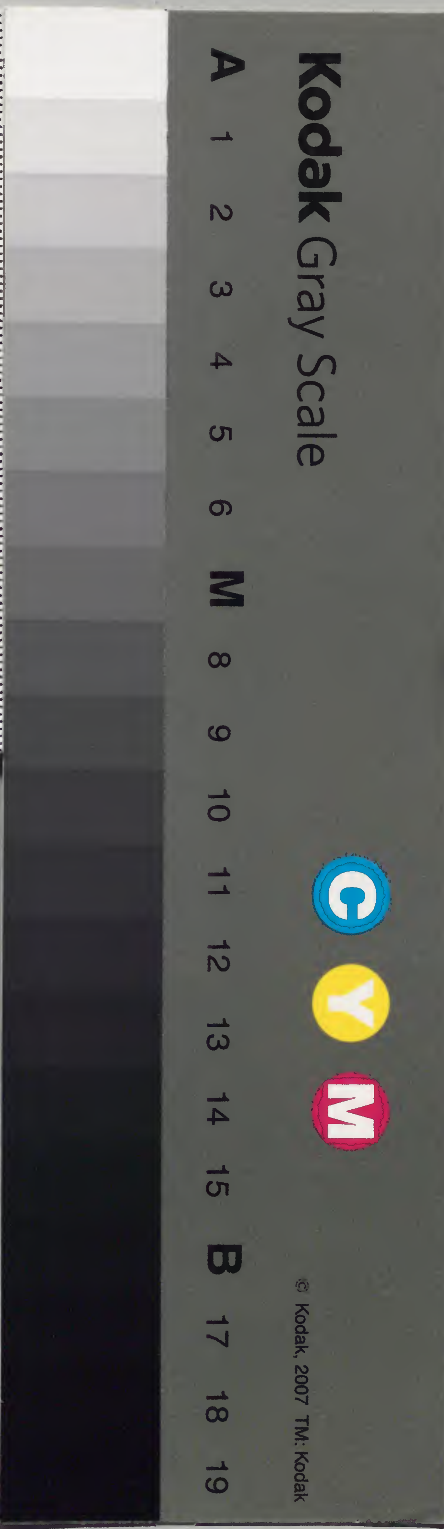
日本書紀傳

十四卷成

三十四

和書
一〇五二號

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (43)
函號	特 85 1



教
文庫
印

圖書
印

高野
印

を云称ふれべあり又仁賢天皇六年御紀に韓白水郎
 嘆と云人右の下に嘆此云波陀詠嘆耕麥之田也と有
 る詠の計を誤水とあり可し其の和名抄に嘆耕麥地
 也嘆耕田壠日本紀師説八太今と有れはあり通証は
 計の誤あるを得知ずし今按詠謂種也と云り然
 有と欲は事ふり有れども種は字惠の假字あり
 合ず万葉二八多籠良家夜晝登不云行路年吾者
 皆悉官通叙為と有り高子等不晝夜と云ず往來小野
 徑を吾の宮参の道と為るとあり後や歌は田を耕と
 民を田子と云水は島を耕る者を高子と云りあり
 けり陸田の字漢食貨志又出たりと云り ○水田種子ハ纂疏は用水而耕
 種曰水田と有か如し本にも名義抄にも多那都母能
 と有る其も僻事なり非れども師の古史成文も美多

丙 一 二 六 八 三 號

○日本書紀傳十四

○百六十五

都母能の訓れたる方陸田に對して名成れば正し
る可し然れども其陸田水田と並云時日事より有
けれ打任せし唯田と耳云く受張りたる名稱は
有けし和名抄に土已耕耜為田和名太漢抄云水田
古奈太田ナニタノ也ナニタノ有り名義抄の訓も此と同し備水田
を美多と云ハ字より如く唯水の有る田と云事あるを
古奈太と云ハ熟田の義あり今も田は水を引せし鉏
返すを古奈頃と云り備仲哀天皇八年御紀に穴門直
踐立所獻之水田名大田と有を始として推古天皇御
紀持統天皇御紀等も水田と云事五所許出たるハ右

の古奈太と云方ある可し然れども田と云ハ水田
の事あり殊更に然云ハ
此あり陸田に對して故より有て其外ハ前
漢馬援傳に水田と云字の有を用ひさせ給へるあり
可し予ハ淡路國ありて水を引せし熟すを唯
田と耳云ひ土地の凹さ處より自然に出水
て熟する田の故其田と云を打任せたる稱ありし
云ハ宝鏡開始章に日神以天狹田長田為御田其第二
一書に日神尊以天坦田為御田其第三一書に日神之
田有三處云々其素戔鳴尊之田亦有三處云々あり有
る如く唯田と云時日水田の事と成て古より然る
ハ固より稲を種る田に限水と稱ありけむを其水を
引せしと耕るを陸田とハ殊更に乾と云ふ言を設

け冠^ノなるを以知べし種子^ヲハ田根^ト云事^トハ稻種^ヲ起^ルめ
たり称^スる可^ク事^ト上^ル百四十^ノ引^ル出雲風土記^ノ文^ヲを
引合^セ讀^ミて知^ルべし穀物^ヲを多^ク那都母能^ト云^ルも田根津
物^ヲ謂^フる^ル稻^ヲを主^トと^ス立^テる^ル称^スる^ルを^モ思^ハ不可^ク故^ニ
生島神詞^ハ又^ハ太神宮詞^ト扶^ス國^者廣^ク峻^ク國^者平^ク久^ク有^ル如^ク國土
の狭^クきを廣^クめ峻^クしきを平^クに成^スす^ル田地^ヲを多^ク為^ス
事^ハあり有^ル水^ハ田^ハ平^ク坦^クあり義^ヲ以^テこ^ノ有^ルべ^クなり
け^レ此^ノ神功皇后御紀^ハ御心廣^ク田^ハ同^ク云^ル事^ヲ見^ル云^ル空^ニ鏡^ノ開^キ
始^メ章^第三^ノ一^ノ書^ハ天^平田^多ども云^ルを合^セ考^スふ
可^ク縦^ニ白^田と雖^モ平^坦に成^スる^ル水^ハ物^ヲを殖^スる^ル地
坦^ニ為^スる^ル水^ハを漑^スて^テ○種子^ヲを母^能と訓^スる^ル五
耕^ル可^ク非^ズ者^ヲを^ヤ

穀物^ノ物^ハ是^ル多^ク此^ノ目^ハ已^ニ此^ノ第^二一^ノ書^ハ推^ス産^ス靈^ノ神
の御名^ヲを舉^ゲ其^ノ下^ニ此^ノ神頭^上生^ス蠶^ノ與^テ桑^ノ臍^中生^ス五^ノ穀^ト
と見^ル之^レ風^ノ神^ノ祭^ノ詞^ハ崇^メ神^ノ天^皇御^世又^ハ出^ル來^レ成^ル物^ノ不^レ
る^ル皇^ノ御^孫命^乃遠^ク御^膳乃^ハ長^ク御^膳止^ム赤^丹乃^ハ穂^ノ爾^ハ聞^ク食^ス
須^ク五^ノ穀^物予^ハ始^メ天^下乃^ハ公^民乃^ハ作^ル物^ヲ云^フ吾^ノ前^ニ予^ハ称^ス
辞^ヲ竟^ク奉^ル者^ハ天^下乃^ハ公^民乃^ハ作^ル物^者五^ノ穀^ヲ予^ハ始^メ草^ノ乃^ハ片^ク
業^ノ尔^ハ至^ル万^ノ成^ル幸^ト奉^ル止^ム悟^ル奉^ル之^レ有^ル百^ノ穀^ノ中^ニ予^ハ五^ノ
穀^物を抽^出云^フ事^ハ甚^ク上^古予^ハ事^ハ其^ノ始^メ
ハ此^ノ天^照太^神此^ノ陸^田種^子水^田種^子を合^セて五^ノ
穀^ト為^シ給^フ予^ハ事^ハ右^ノ第^二一^ノ書^ハ照^ル應^セて曉^ス

る可き者あり借其稻粟稗麥豆ハ其種類を合せて云
あり和名秋ノミ稻類麥類粟類豆類麻類と有り稗ハ
其麻類ノ一種あり然レハ此ノミ大豆ト小豆ト出レ
ルレモ共ニ豆類ニ攷む可けれバ右ノ五種ノ属ハ猶
幾許有テ皇國ニ傳ハレタリ外國ニ散ルニ在テ追次
ビテ本津御國ニ復シ渡來ルタリ共ニ人民ノ食テ活
心ヲ限リ物ハ一ニ此保食神ノ御身ナリ成ルニ其五
種ノ穀物を祖トシテ品ニニ成変ル者ナリ有けれ
バ萬國ノ全ニ在ト有ユル穀物ハ一ニ皆其始此ニ在
レタリ者ナリ

獨此外ノミ田園ニ殖生シ菜蔬ノ類ト雖
レ皆此神ノ御身ナリ成初メ出來ル事

己ノ八十三丁ニ事ノ一証
ノ註セテ見テ知ル可シ 斯レハ五穀ト云月モ天照
太神ノ高天原ニ事始メ定メさせ給ヘテ事ナリ其
中ノミ稻を以テ最上ノ物ト立給ヘテ故ニ下ニ
即以其稻種始殖于天狭田及長田其秋粟類ハ握莫
然甚快也ト有レ如ク殊更ニ其御政を物為させ御在
シ坐テ西蕃ニ永禊為五穀之長ト云レ或永嘉穀也ト
云ル者ハ大ニ相違シテ者ナリ彼ノミ五穀ト云名
ノ傳ハリテ其數ヲ定有レ大ニ貴命火彦名命ノ被シ
持渡御在シ坐テ其古名淡洲ノ地給ヘテ故ニ上
賀風土記を引テ云ルハ如ク此ノ御天降以前ノ風儀

百三十一イ
七丁

の移れざる者あり然れども彼は五穀と云物に説く種
ニ在りて定まらざるが禮記月令註に稷麻豆麥黍と
見えたりは稻ハ其員外なるは此ハ神真にして彼を
馭戎ヲ神在り坐し三皇五帝と聞ゆる五者都せり
ニハ甚く北倚たる地ありて例ハ曠多在り故に其
州名を赤縣と云計りて在りは稻ハ甚く希少
る物多し故に五穀と云ふ此ハ古稱ハ用ひあが其
中又收りばざりし其ハ齋庭之穂を以て天津日
継と天下萬國を照臨し給ふ皇御孫尊の大御業に定
まると可事所思し看す故に忌憚り奉り世給へ

る者ふらむ有はる己ありと説くか如く彼ハ古名を淡
洲と云ふ粟ハ良しと故あり此瑞穂國に對しては由
を思はざる其事ハ意ハ知りてむく黍稷稻梁辨
云物ハ彼邗江北少稻故貴賤常食黍稷之雜穀又或雜
之以彫菰薏苡之類而給食之不及也江南常食稻米貴
賤共不食麥粟也古者江南為中國之外而中國之人賤
者不得食稻米唯官有稻人稻田使者掌供於祭祀禮食
耳論語云食夫稻衣夫錦於汝守守以稻對錦且三年不
食者則佳品珍膳而非常食也云故古者五穀品目不
收稻米至稱六谷則始收之而江南及我邗以稻為常食

一私記は天者五例元
美人之言也言此時初
定之邑也言此時初
官職初置也言此時

後儒以今料古以我推彼而云中華則聖賢所出秀氣所
鍾之邦也其食富出我邦之上飲羨渴望漆指而嘗之是
以及疑古書欲求其說以寔之母乃鑿字可為浩歎其
云々然其說あり憐む可き者ありや
其三皇五帝
の三五本國考ふ云水たろ諾ふ可し又其赤縣度制考
も右の書を引て江南江北と云ハ其西端雍州より
新楊の二州を經て東海に注ぐ大江有り其大江を界
とて雍新楊の半國あり南方を江南と云ハ其半
國より北方預青兗冀并函などの州を江北と云ふ
三皇以來歷代の都せろ所ハ皆北方の地あり此を中
國と稱し江南の地をハ外蕃と爲なりと云ハ此を中
如し然れども其江南の福と雖も皇國の瑞穂とハ日
を同じうして云べし程の
跪す未ふる事人ハ知てむ
謂農人之長と有る御説の如し宝鏡開始章第三一書

山出雲風土記に所造
天下大神御子知布
布衣命天地初判
之後天神御田之長後
奉坐之有る右の天
邑君の如し

小天邑并田と云名有るハ此に於て農作の民出來又
其に就て邑里も出來り故に其百姓を治る邑長
も來り者あり邑字神武天皇御紀に此云務羅と有
り君の宰の謂ふる可し垂仁天皇二年御紀に郡公を
牟良豆加佐と訓ふる是あり和名抄に漁子和名伊手止
利と有る對して漁父一云漁翁無良岐美と有る漁村
の中より其古老を立て漢子を宰とる者と為る故
に富音邑里ふハ其名亡て却て漢村と邑君の古號を
傳へたり者と所見たり已に神武天皇御紀に遼東
之地猶未霑於王澤遂使邑有君村有長谷自分疆用相

神功皇太后紀村
布衣有向布衣
片假字の状似たる故
に誤りたる其

凌躒と有れば私と立て農長にありし猶色君とハ
云ふありけり 右の村字を所礼と訓るハ在處の意
も右の訓も同ト然れども若義杖は色は半良の佐
登とも云訓有て村字も右の二訓の外無水の上の
色ハ半良と訓て下なる村ハ佐登と訓て可か如し
雖も所々村を所礼と訓るハ容易く改む可く
ざるなり故思ふは景行天皇十八年御紀ハ天皇向其
火光處曰何謂色也國人對曰是八代縣豊村と云事有
り天皇の何謂色不と向給て其土地を指て宣
へる故は色あり國人の豊村と對奉れり其在處を
以て申せざる故は村ハ云ふあり其村を佐登と訓る
ハ郷と村とハ一なる者あり出雲風土記ハ仁多郡三
津郷云々今産婦彼村稻不食云々と有る如し其郷ハ
戸令は凡戸以五十戸為里毎里置長一人と見えたり
ハ土地の寛狭あり抱りて戸數を以て定むる法ハ
水ハ佐登ハ任處の義ふて村を所礼と云ふ異あり
字書ハ人所聚居謂之村落と見え豊を村也又田廬也
と見え見えたり水ハ土地より色と云ハ人戸より村と云

不古の格と又景行天皇二十八年御紀ハ朕聞具東夷
見えたり 也識性暴強凌犯為宗村之無長邑之無首各貪封塚並
相盜略と有る右の邑有君村有長の及ぶる其君ハ
富て首と有り又成務天皇四年御紀ハ自今以後國郡
立長縣邑置首即取富國之幹了者任其國郡之首長云
こと有る長と首と相並てるを見心ハ次ハ五年秋九
月令諸國以國郡立造長縣邑置稻置云々隔山河而分
國隨阡陌以定邑里云々と有る本年の御制ハ此時ハ
被行たれり者あり國郡ハ縣邑を管たり其任重
故ハ造長を立る縣邑ハ唯阡陌を以て定むる程

久安百首の降
積る白嶺の雪ハ
稻長の加比のも
衣乾と見えけり
と有る此稻長
曲農区の長キ
と聞ゆれば右の
税長此少近一
大嘗奉式小齋
郡に至りて後穂
の事を主るを
稲實ト部と
ふと思合す可し

區分^{コミツケ}ける地多々依て其長と一々稲置を置させ
給へるあるが稲置ハ稲君多々可し其邑里の首^{ハヒト}と一々
其田祖を貢進^{コト}司と通ぬれ右の邑君も同トを曉^ト
可^{コト}首ハ大人^{オホト}あり其稲置を釋^ト公望私記曰案今祝
長也と有る祝字心得ず一本ハ祝と有る職員令
小主税寮云々享倉庫出納諸田祖奉米碾磑事と見
えたり水ハ諸田祖と有る納^ト人々を税長と
云^ト一^ト通証みハ村長也と有る水^ト難^ト○稲種ハ伊那
和^ト改^トりて有る者見ゆれば從^ト難^ト○稲種ハ伊那
陀祢と訓べし天孫本紀ハ建稲種命と云右の例も有
り又出雲風土記ハ飯石郡多祢郷所造天下大神大元
持命與須久奈比古命巡行天下時稻種隨此處故云種
と有る其種ハ田根^トりて田^ト殖^ト生^ト立^ト謂^トる事

皇統^ニ伏田長田謂
田畠^ニ長短^ニ天
照大神^ニ公田^ト也

上^ト註^トるが如^ク此ハ水田種子を名義^ト故^ト多那都母
能^ト云^トるハ穀^トを田^ト殖^トるが本^ト多^ト依^トて打^ト任^トせ^ト
然^レハ云^レ習^レハ^レ者^ト然^レハ和^レ名^ト故^トも稲類^ト穀
記云五穀以都^ニ乃^ト太奈豆毛乃^ト有^ト五^ト字^トを除^トけ^ト
太奈豆毛乃^ト成^トて五穀^トと云^トも稲耳^トを宗^トと立^トたるが
故^トも^ト○殖^ト于^ト天狭田及長田ハ宝鏡^ト南始^ト章^ト天照
太神^ト以^ト天狭田長田^ト為^ト御田^ト有^ト是^トあり其^トを古事記
ハ天照大神^ト之^ト營田^ト有^ト即古^ト屯田^ト後^ト宮田^ト
類^トして天下^トを悉^トく^ト所知^ト有^ト天皇^トの御上^トしてハ
世中^トの事^ト萬^ト御心^トに任^トせ^ト世^ト御在^ト坐^ト御事^トハ
ハ有^トれども猶^ト其^ト大宮^ト近^ト處^トに^ト日^ト々^ト供^ト御^ト稲田

仁德天皇二十七年御紀の是歲
 興屯倉于來自
 屯倉此云
 屯倉此云
 屯倉此云
 有之始と

を定めさせ給ひて太切ト物成させ御在坐す
 事起り此在り又日この菜蔬は古より大和国に六
 之今京に成りて所ニ御園を置せ屯田と云事仲哀
 させ給ひし事己に八十三丁云々
 天皇二年御紀に定法路屯倉と所見たり其より
 前日己に畿内より有つ事灼然其仁德天皇御
 紀に額田大仲彦皇子將掌倭屯田及屯倉而謂其屯田
 司出雲臣之祖淤宇宿祢曰云云爰淤宇往于韓岡即率
 吾子籠而來之因向倭屯田對曰傳聞之於纏向玉城宮
 御宇天皇之世科太子大足彦尊定倭屯田也是時勅旨
 凡倭屯田者每御宇帝皇之屯田也其雖帝皇之子非御

又田令に九畿内置官
 田大和撰津若三十所
 河内山背各二十所
 每三所配牛一頭其牛
 令三戸食之頭と記す

△十九年再屯
 田の事と云り

宇者不得掌兵と見えたる是より其重き為させ給ひ
 事知べし孝德天皇大化二年御紀に詔有り且罷官
 司處ニ屯田及古ニ職^職福以其屯田班賜群臣と有り此
 より官田を置られたり見ゆ職員令より宮内省職
 掌官田の義解に謂供御福田分置畿内者若為官田
 也と見えたるを宮内省式に九省營田四十所大和国
 九所山城河内二国各八所撰津国十四所云々と有り
 九省營田福踰年之後不供御云々九營田收納帳云々
 九營官田者云々と有り猶屯田の名殘る者より其
 屯田司の後の宮内省の如くして仕奉りし儀式

十一月廿五奏御宅田稻教儀其日宮内省云々奏云御
宅田獲稻事申賜年止宮内省官姓名云々奏曰四畿内
回乃今年供奉礼留御宅田合若干所獲稻若干束云々
供奉礼留事申賜波久止申云々有御宅田古
右形如遺 ○天狹田釋秘訓云阿麻能佐那陀と有
存水者あり
水と長と對入たる狹とハ阿麻能佐那陀と訓べし
天孫降臨章第一一書云伊勢之狹長田五十鈴川上と
云事見えたりども其ハ天狹田長田と同一く其地
と狹田長田の有り依り其を疊に重ねて狹長田と云
る可ければ此とハ異なり今真田經と云物有り細
く長と物多れば狹長糸紐と云事と聞かれ此狹田
を然訓む時ハ狹長田と云成り彼と此と差別無

き不至る可し又秘訓云文永三年七月廿八日戊午天
晴今曉卯時依有先師夢想之子細所加點名字也と有
水ハ其時逆以佐那と訓來水と那を加へて佐那陀と
訓改めたり故に所加點名字也と云るあり 然るを
下卷曰伊勢之狹長田五十鈴川上由是觀之則其始殖
之地為伊勢國五十鈴川上可以知其云々何の辨
也無き説あり此云々宝鏡南始章云々天狹田及
長田ハ正しく皇太神の大坐す高天原云々故云々
天集とハ云るあり如何但五十鈴川上ハ狹長田と云
るに及ぶし考るに此ハ決りて天安河の河上ハ
山田云々あり寔に狹田長田と云状ハ為りけむ
和名抄云野老傳曰横截山作畠謂之截幡と有る如く

然る山傍の地を鑿り田と為せるハ或ハ短ク或ハ横
 長クあるハ出來る者ナリ有ルハ水清ク其河上も
 △播磨風土記ハ賀古郡長田里は昔大帯日子命幸行
 別嬢之吾此道也長田初云長田哉故曰長田里と有
 是の創る
 有ユク有ユク出雲風土記國引の文は自多久乃打絶
 たるハ御心の長く閑やの御神子生事也佐太水海有り神名ハ佐
 長田ハ長田ハ係て詔給也御見えてハ佐太ハ狭田ハ佐太ハ事弥乃
 △和名抄郷名ハ播津國郡伊賀國伊賀郡伊賀國山河ハ傍る地
 飯野郡遠江國長上郡上野國吾妻郡陸奥國白川郡
 播磨國賀古郡等ハ各長田郷有リ神名式ハ近江
 國島島郡美作國大庭郡ハ長田神社と申ル見
 在御菅田ハ成リ給ハ山田ハ殊ハ稲ハ能ハ
 事有リハ御事ハ伺ヒ奉リ増長田

△室綱出現章第四
 一昔ハ多狩樹下然
 不獲地云九八洲國
 之内莫不播磨成昔
 山有ハ有ハ字長と訓
 仁賢天皇八年御紀ハ
 年麻波流ハ訓ハ番
 息ハ長子

云例ハ神功皇后御紀云々神ハ御誨ハ祠吾于御心長
 田國と見え古事記遠飛鳥宮段ハ長田大郎女と申
 有リ新古今集大嘗會稻舂歌ハ神代より今日ハ例
 八束穂ハ長田ハ稲ハ莫ハ初ハ有ハ此を思ハ
 了詠ハ通証ハ狭田長田本是廣狭長短各元其用
 信ハ思ハ古唯其田ハ狭ハ狭田ハ云ハ
 長ハ長田ハ仁多郡横田郷古老傳云郷中
 有田四段許形聊長遂依田而故云横田ハ有ハ思
 △大神宮御宜諸帳帳一所皇大神乃横田平田乃稲實
 波朝御氣夕御氣止草ハ以字消ハ活ハ古事記日代宮段
 口傳ハ七ハ見ハ又
 歌ハ意富迦波良能宇惠具佐ハ有ハ大河原之殖草ハ

然る山傍の地を墾て田と為せるハ或ハ短ク或ハ横
ニ長ク有ル出来ル者ナリ有ルハ水清キ其河上ニ
地ハ御田ト成リ給ヒけむク然ル狭田長田ハ
有ルナリ有テ出雲風土記因引ノ文ニ自多久乃打絶
ニ佐太神子社又佐太川又佐太水海有リ神名ナリ佐
太大神ト見エバ水ハ狭田ハ佐太有ル事弥々
著明ナリ ○長田ハ那賀多ク山河ニ傍ル地ニ
細ク長ク延ル田ト成ル者ナリ借田ハ廣ク平
方ニ有テ賞ベクハ然ル如此ハ狭田ハ長
ク御菅田ト成リ給ヘリハ山田ハ殊ニ稲ハ能
ク實ル事有クハ御事ト伺ヒ奉ル借長田ト

云例ハ神功皇后御紀ニ神ハ御誨ニ相吾于御心長
田國ト見エ古事記遠飛鳥宮段ニ長田大郎女ト申
ル有リ新古今集大嘗會稻舂歌ニ神代ヨリ今日ノ例
ト八束穂ニ長田ノ稲ハ莫ト初ル有ル此を思ヒ
テ詠ク有リ 通証ニ狭田長田本是廣狭長短各充其用
ハ信トシモ思エ古唯其田ハ狭ハ狭田ト云ハ
長ハ長田ト云ハ別ニ意を用ヒテ有ル有
有田四段許形聊長遂依田而故云横田有ル有ル思
合テ ○始殖ハ農作ノ事を此ニ始給ル有ル其ハ下
云ベリ殖ハ宇惠トシ宇トシ活ク古事記日代宮段
歌ニ意富迦波良能宇惠具佐ト有ル大河原之殖草ト

仁賢天皇八年御紀ハ
年并流記ナリ
息ノ義ナリ

仁賢天皇八年御紀ハ
年并流記ナリ
息ノ義ナリ

△出雲國土記云出雲郡吳談部家西北九里二百四十五步所
造天下大神御子加布都努志命天地初判之後天御
領田之長仁奉坐之即經神坐鄉中故云云大神御子加布都努志命
有正倉と有も田の長たるを以て御田と云ふなり又姓を田族と為り大加景行天
氏録和泉國神小民直天穗日命十世世孫若菜足尾之後轉孝德天皇御紀見元万葉五十七伊弉
也と有をも神名式云其大高郡小美野孫神社有稻表業と見元万葉五十七伊弉
右の同トく田長多謂れ即田持の義なり神所祭少
尾張風土記云中嶋郡鹿瀬山有神号最田見社所祭少
考各命也と有ハ故ハ其神の坐伊賀國の地谷努田見十八二十三
ハ石の如くして此神の耕種為菜菔と謂る為流曾能奈里波比守安米布良受日能
△又聖異記云不能營農令懈產業と有る產業志云
利波比と訓と又牧家營造產業とも所見塊又遊仙窟の
家業を耶利波比と訓此歌云て殊ニ農作の事を奈里波比と云意知れ

今日本書紀傳十四
○百七十七

△を河海故小
民業孟津故
稻農の字を
此

△借帝陸風土記云常陸國境是廣大地流緬魏土壤大墳原
野肥衍怒發之處也海之利亦人自得家是饒有身
勞耕力竭紡者禮即有故禮禮禮禮有禮禮那
理波比と訓るをと思合す可

小も持む所少く田舎の往來ハ思係好ハ甚心細ハ此
と有り右の農事を云るなり借那理ハ那流より稻穀
を作り其實生るを一年の所行ト為る謂る可一可
業二十二十六下佐伎牟理尔多と牟佐和伎尔伊弊能伊
毛何奈流敵伎已等字伊波須伎奴可母と有り同トく
農業の事を云るなり然ルハ休言ハ那理と云べく活
用せてハ那流とハ那良牟と云
べし其を耶理波比と云ハ業延より常位不断勉め
成中意より波比ハ種波比氣波比と断り言を
一二年紀ハ詔群臣曰今朕
賦云故群臣共視之決横瀬而通海塞逆流以全田宅

○日本書紀傳十四
○百七十七

皇紀... 皇極經世一書... 皇紀... 皇極經世一書...

農月と云ふ

あり此事... 皇紀... 皇極經世一書... 皇紀... 皇極經世一書... 皇紀... 皇極經世一書...

源語 卷

河海救小 民業孟津板 給農の字を 此

小も持む所少く田舎の往来も思係ねが甚心細けれ... 毛何奈流敵伎已等予伊波須伎奴可母と有り同トク...

日本書紀傳十四

百七十七

カクハ
田有^{カクハ}廬と云
事^{カクハ}乃^{カクハ}其農を
為^{カクハ}る地を云^{カクハ}称
さる^{カクハ}其

と有^{ナリ}其農を為^{ナリ}る人^{ナリ}の位^{ナリ}む所^{ナリ}ある故^{ナリ}に依^{ナリ}る称
より農^{ナリ}所の謂^{ナリ}より經^{ナリ}體^{ナリ}天皇^{ナリ}御^{ナリ}紀^{ナリ}の天皇^{ナリ}父^{ナリ}聞^{ナリ}媛^{ナリ}顔^{ナリ}容^{ナリ}
妹^{ナリ}妙^{ナリ}甚^{ナリ}有^{ナリ}微^{ナリ}色^{ナリ}自^{ナリ}近^{ナリ}江^{ナリ}国^{ナリ}高^{ナリ}嶋^{ナリ}郡^{ナリ}三^{ナリ}尾^{ナリ}之^{ナリ}別^{ナリ}業^{ナリ}遣^{ナリ}使^{ナリ}躬^{ナリ}于^{ナリ}
三^{ナリ}国^{ナリ}坂^{ナリ}中^{ナリ}并^{ナリ}納^{ナリ}以^{ナリ}為^{ナリ}妃^{ナリ}遂^{ナリ}産^{ナリ}天^{ナリ}皇^{ナリ}と有^{ナリ}る別^{ナリ}業^{ナリ}を^{ナリ}耶^{ナリ}理^{ナリ}
柝^{ナリ}許^{ナリ}呂^{ナリ}と訓^{ナリ}之^{ナリ}又^{ナリ}多^{ナリ}理^{ナリ}富^{ナリ}と訓^{ナリ}るハ別^{ナリ}業^{ナリ}と田^{ナリ}宅^{ナリ}とハ唯^{ナリ}
字^{ナリ}の換^{ナリ}水^{ナリ}と耳^{ナリ}と^{ナリ}共^{ナリ}に農^{ナリ}作^{ナリ}を營^{ナリ}ふと為^{ナリ}す設^{ナリ}けたる
宅^{ナリ}の由^{ナリ}あり又^{ナリ}其^{ナリ}を多^{ナリ}理^{ナリ}富^{ナリ}と云^{ナリ}即^{ナリ}此^{ナリ}也^{ナリ}無^{ナリ}類^{ナリ}の^{ナリ}よ^{ナリ}即^{ナリ}
其^{ナリ}田^{ナリ}宅^{ナリ}は在^{ナリ}て耕^{ナリ}る物^{ナリ}の称^{ナリ}なり^{ナリ}同^{ナリ}二年^{ナリ}御^{ナリ}紀^{ナリ}の元^{ナリ}と蒼^{ナリ}
生^{ナリ}樂^{ナリ}於^{ナリ}稼^{ナリ}穡^{ナリ}と有^{ナリ}る其^{ナリ}二^{ナリ}字^{ナリ}共^{ナリ}に耶^{ナリ}理^{ナリ}波^{ナリ}比^{ナリ}と訓^{ナリ}むハ帝^{ナリ}
の事^{ナリ}ありと名^{ナリ}義^{ナリ}抄^{ナリ}に多^{ナリ}稼^{ナリ}汝^{ナリ}呂^{ナリ}志^{ナリ}と有^{ナリ}る種^{ナリ}蔣^{ナリ}より穡^{ナリ}

全^{ナリ}毛^{ナリ}詩^{ナリ}生^{ナリ}民^{ナリ}篇^{ナリ}
誕^{ナリ}后^{ナリ}稷^{ナリ}穡^{ナリ}と有^{ナリ}
耶^{ナリ}利^{ナリ}波^{ナリ}比^{ナリ}と訓^{ナリ}
たり説^{ナリ}文^{ナリ}穀^{ナリ}可^{ナリ}
牧^{ナリ}向^{ナリ}牧^{ナリ}曰^{ナリ}穡^{ナリ}と有^{ナリ}
る是^{ナリ}なり

を阿^{ナリ}伎^{ナリ}袁^{ナリ}佐^{ナリ}未^{ナリ}と^{ナリ}加^{ナリ}理^{ナリ}袁^{ナリ}佐^{ナリ}年^{ナリ}と^{ナリ}有^{ナリ}る秋^{ナリ}收^{ナリ}又^{ナリ}新^{ナリ}收^{ナリ}
の事^{ナリ}より專^{ナリ}稲^{ナリ}に依^{ナリ}る事^{ナリ}を知^{ナリ}べし又^{ナリ}稼^{ナリ}を禾^{ナリ}苗^{ナリ}と記^{ナリ}
又^{ナリ}郁^{ナリ}久^{ナリ}理^{ナリ}又^{ナリ}久^{ナリ}煩^{ナリ}又^{ナリ}宇^{ナリ}惠^{ナリ}と有^{ナリ}る饒^{ナリ}より^{ナリ}作^{ナリ}る利^{ナリ}より
殖^{ナリ}より神^{ナリ}祇^{ナリ}令^{ナリ}義^{ナリ}解^{ナリ}より苗^{ナリ}稼^{ナリ}と有^{ナリ}る有^{ナリ}て稼^{ナリ}穡^{ナリ}と云^{ナリ}る其^{ナリ}
生^{ナリ}長^{ナリ}と收^{ナリ}穡^{ナリ}とを^{ナリ}己^{ナリ}に海^{ナリ}官^{ナリ}遊^{ナリ}行^{ナリ}章^{ナリ}第^{ナリ}七^{ナリ}書^{ナリ}に兄^{ナリ}作^{ナリ}田^{ナリ}
云^{ナリ}る心を著^{ナリ}す^{ナリ}己^{ナリ}に海^{ナリ}官^{ナリ}遊^{ナリ}行^{ナリ}章^{ナリ}第^{ナリ}七^{ナリ}書^{ナリ}に兄^{ナリ}作^{ナリ}田^{ナリ}
者^{ナリ}汝^{ナリ}可^{ナリ}作^{ナリ}汝^{ナリ}田^{ナリ}兄^{ナリ}作^{ナリ}汝^{ナリ}田^{ナリ}者^{ナリ}汝^{ナリ}可^{ナリ}作^{ナリ}高^{ナリ}田^{ナリ}と見^{ナリ}えて天^{ナリ}神^{ナリ}
御^{ナリ}子^{ナリ}と雖^{ナリ}も未^{ナリ}皇^{ナリ}子^{ナリ}等^{ナリ}に御^{ナリ}在^{ナリ}し坐^{ナリ}し程^{ナリ}の農^{ナリ}を營^{ナリ}ま
せさせ御^{ナリ}在^{ナリ}し坐^{ナリ}しより其^{ナリ}天津^{ナリ}高^{ナリ}御^{ナリ}座^{ナリ}を受^{ナリ}冠^{ナリ}坐^{ナリ}し後^{ナリ}
天津^{ナリ}日^{ナリ}嗣^{ナリ}と^{ナリ}天下^{ナリ}公^{ナリ}民^{ナリ}に献^{ナリ}上^{ナリ}る田^{ナリ}税^{ナリ}を圃^{ナリ}食^{ナリ}す
御^{ナリ}職^{ナリ}より渡^{ナリ}る世^{ナリ}給^{ナリ}へども猶^{ナリ}官^{ナリ}田^{ナリ}を置^{ナリ}せさせ御^{ナリ}在^{ナリ}し
坐^{ナリ}て供^{ナリ}御^{ナリ}り新^{ナリ}に充^{ナリ}給^{ナリ}へし事^{ナリ}右^{ナリ}百^{ナリ}七^{ナリ}十^{ナリ}に註^{ナリ}るが如^{ナリ}

公事あり雖も等しく
公民なる事風神祭
詞に考合して略し
但後、王臣と分ちて公
民を以て其公民
を分ちて奴婢を以て
事と成らざるを愈
古く遠く成りし者

龍田風神祭詞に五穀物^{宇始}天下乃公民乃作物
字云こと有り下は王卿等百官^能人等倭国六縣^能刀
祿^カ田^ノカ^ル至^ス云こと有を上は照應せて見よ其王
卿以下は公民^カ謂^ハる大御田族多る者なり其ハ
大忌祭詞に親王等^{王等}臣等天下公民能^能取作奥都御歳者
云こと有を以知て但此ハ親王等王等臣等と天
下公民とを別ち記さ水たれども其ハ王臣の其祭場
に参来ると就て唯人混りす事トす用意なり然
を和名抄に微賤類と有て日本紀云人民和名比止久
佐一云於保美大加良と有る其訓ころハ有れ其を
微賤類に收めたるハ已く古義を失ひたり者なり孝
徳天皇大化元年御紀に凡国家所有公民大小所領人

衆と有る官位を賜はる程ハ人をも猶然云り其年男
サ之法を立給ひて良を公民賤を奴婢と被別れり事
見也其ハ良と賤と上と下と然る差別ハ有れ水天
皇の御上よりハ押並て大御田族と云持と云者
ハ故甚く上水と世より貴賤の差ハ氏族と品位と
の別耳有り共々等しく親耒耜を把て田地を耕し耘
りして農作^{ナリ}ノ事を常ノ業と為て其賜ハ水々大御田
の御調物を備進りて天皇朝廷に仕奉りし故ハ共
ニ公民と云りし者も悉く農ノ一民耳なりしなり
其中ハ中臣連忌部有様サ君鏡作連玉祖連おど家
ニ属たる職掌有て後ハ云々四民の如く當昔已に別
水たる状もてハ有れ水も其業^{ナリ}ハ上云る如く農

作を以て其身の事業と成したる者あり然れハ農の
中より筋骨の強壯する者ハ士と成て藩屏と仕奉り又
其機巧ウツクミを以て巧なる者ハ手伎テビキとして仕奉る謂ゆる工類
あり又物を市に持出して交易アヒカフを取次を為る者ハ商是
りカ雖も後世の如く農作の本業を棄ててアヒカフ士工商の事
を以て其家と為る事ハ無くして何方迄も唯農を耳
力あり家業と為つるは是ハ天照大神の御世より天
下蒼生の道に惟神を立給ひ定給ふ道の道たる事を
明く奉る可く又傳七ハも引て註せる皇祖天神
の二柱御祖神の事依り奉る世給へる大御命の修理イ

固成是多陀用幣流之固と宣給へる御旨を以合せて
考奉る可き者よあり有けり但右よ云るは是ハ上古
の状より異なりと雖も天下萬世は推度して道と云
者是ハ水ハ世に沼草れり制度を規矩として道と
大本を茂ハ如○秋ハ熟アハり稲アハの熟るも時を云るは室
鏡開始章の春則云て秋則云ると並出たれハ其所は
云ふ方辨易くありぬ可けれハ傳十九三十一六二百五卷ハ註す可し○
蚕類カハ或説ハ穀實而蚕稔也と云るが如し其蚕ハ万
葉十九ハ蚕柳者雖見不飽鴨又ハ四蚕柳ハ折雜又
十六ハ四蚕柳之獲為吾妹と有る下蚕柳あり其蚕カと
同く稲穂の豊登る時ハ其末の頗頗一蚕る者あり

ハ十三 為蚕柳十緒又

△播磨國土記
難波長柄豊前
天皇之世是里
中有百便之野生
百枝之稻即阿
曇連百足仍取
其稻一畝之有
も右の御紀の類
ありべし又三代
寶錄貞觀元
年十月廿八日上
國獻嘉嘉木一莖
三十穂而岐稻一莖
九穂と有り

バ多ク天智天皇三年御紀一宿之間稻生而穂其且
カクレテアキラ
虫類而熟カ見えたる其虫類天孫降臨章第一一書
ハ頗頗也此云歌ハ予志シ同小訓ハを以て猶考心
るハ海宮遊行章第六一書ハ低ハを宇那陀禮ハ訓ハ
頸ウケ虫シ多クを古事記大國主神御歌ハ夜麻登能比登母
登須ハ岐宇那加夫斯ハ有ハ傳之一本薄頸頭ハ薄
の穂ハ靡ハ垂ハ事ハ比ハ入ハ女神ハ低ハ給ハ事ハを宣
へる者多ク此を以て虫ハ頭ハ同ト趣ハ由ハを
ハク多ク名義抄ハ低字ハ加多夫久ハ多流ハ訓
賦ハ五穀虫類ハ有ハを以て文ハ成ハ引ハ西都
字書ハ類實繁頌ハ而虫末ハ也ハ有ハを合ハ考ハ不可ハ

類ハ穂多ク穂ハ秀多ク天孫降臨章第六一書ハ秀起
浪穂ハ有ハ神武天皇御紀ハ浪秀ハ有ハ又磯輪上
秀真國ハ有ハ國號考ハ説ハ如ハ上ハ浪ハ小
て穂ハ保水ハ説語多ク又古事記石室戸段ハ上枝中
枝下枝ハ有ハ朝倉宮段歌ハ上枝ハ本都延ハ有ハ万
葉九ハ二十ハ最末枝十三ハ六ハ又ハ末枝ハ有ハ倭姫命
世記ハ在稻一基生本ハ一基ハ為ハ五末十穂茂也又本
波一基ハ為ハ天末八百穂茂也ハ有ハ本ハ對ハ末ハ穂
と云事ハ和名抄ハ穂和名保永穀末也ハ有ハ合ハ万
葉八ハ四十ハ秋田之穂立繁之所思又ハ吾之時有早

○日本書紀傳十一
○百八十一

田之穗立と有ハ立穂を云ふリ二八ハ秋之田穂上尔
 霧相朝霞十五十ハ秋田之穂上尔置白露之ハ唯穂の
 出たハ田ハ秋あり二十四ハ秋田之穂向乃所縁十五
 一ハ秋田之穂向之所依十七十七ハ秋田乃穂年伎見
 我底利と有ハ穂向ハ其虫類ナ時ハ一方ハ皆々
 向舞くを云ふリ四十七ハ秋田之穂田乃苜蓿加八十三
 六ハ秋田乃穂田于鴉之鳴十四十三ハ白露者置穂田無
 跡とも有ハ穂田ハ苜蓿ナ時ハ至水ハ田を云ふリ故
 名義抄ハ穂を比豆と訓ハ秀を比豆と訓ハ穂と秀
 と同義ナて物ハ上ハ秀出ル義ハ之を知心ハ右ハ秀
 真国又

△記傳十五小穂
 と類ハ同物ナ
 九ハ富とハ穂
 不出ルハ加比
 ハ具体云各ハ
 中と云れル
 如く實ハ穂ハ

ハ国秀あり云ふ秀ハ物ハ上ハ秀出たる意ナリハ
 高ナを云ふハ其義ハ等ナリ又右ハ秀
 起浪穂ハ云ハ浪ハ上ハ水ハ穂穂ハ見ル
 云成ハ秀ハ穂ハ佐久ハ云事ハ例有ハ万葉十ハ朝顔
 乃穂庭前不出又皮為酢ハ穂庭前不出十一ハ含花之
 穂應咲あり云ハ是ハ又木ハ末ハ穂ハ云事有ハ
 十八ハ安之比奇能夜麻能許奴礼能保與等里天可射
 之都良久波知等世保久等曾ハ有ハ然ハ實ハ花
 小ハ捕ハ其最上ハ出
 此を穂ハ云ハリ
 ○類を此ハ穂ハ訓ハ
 此を加比ハ云ハ正ハ本語ハ有ハ然ハ公
 穂ハ右ハ云ハ如ハ稲ハ最末ハ秀出ル由ハ名ハ
 廣ク其想テハ直ルハ類ハ頃實ハ專其實を云ハ
 乃御年神詞ハ初穂ハ千類ハ八百類ハ奉置ハ穂南高
 知脛腹滿雙ハ汁ハ類ハ稱辭竟奉年ハ先初ハ穂名ハ

る初穂の事を云て次より其豊なりたる千類八百類を
云て其献る用意を明く申し次より其を以て酒に
醸りたる事ミシク夥大なる事ミシクを云ひ終より其酒に
加穂との事を汁母類母と云る中臣壽詞に汁仁實
仁と云は同ト是類より實の意有を考ふ可し所
は冰さや水分神詞にも奥都御年宇八束穂能伊加志
穂志寄志奉者皇神等志初穂汝類毛汁毛云と有て
右の趣は異なる然れハ穂ハ其稲の穂先任を云
ひ類ハ其穂先實入りを云て其體用の差有る事
る者あり類アヒと蜜類アヒと亦同トハ神世七代章第一一

書ふる豊国主尊の亦名を豊香節野尊とも浮經野豊
買尊とも申奉りて香節と買と一なるに異ならず又
上なる蜜類タリホの下に云る事共を考合す可し江次第
前本謂之稻切穂謂此類と有る其神は献るに就て
の注より稲多在に其類は熟めるに即類と
る者あり又水分神詞に朝御食夕御食能加牟加比
云と又出雲風土記に朝御饒高養夕御饒高養と有
ハ大倭本記に朝夕之食向と有同ト又神類と云稱
も必在ぬ可し事本より神稲を久万志呂と
云るをも思合す可し尔雅の八握ハ纂疏に謂稲穂之
長と説せ給へるが如しハ八握ととも思へども顯宗
天皇御紀室壽御前に出雲者新墾新墾之十握稲之穂
と見えれば猶八握劔十握劔の例ありし然れど

以彼ハ四指を並搏むを一握として八握ハ八搏より
 十握ハ十搏より正しく其身ハ長さ量を云ふも有べ
 け此も稱云ふ八握十握ハ唯其岳類の長き事を
 美稱して是しく云ふ耳より右の叙例との異ふも
 可し御年神詞奥津御年手ハ八束穂能伊加志穂尔皇神等能依志
 奉者水分神詞尔奥都御年手八束穂能伊加志穂尔
 寄志奉者大忌祭詞尔奥都御歳手八束穂尔皇神能成
 幸賜者ると見え大倭神社註進状ハ御歳神者守護永
 穀神也是以八束最稲為神體と有しか唯穂ハ長き
 ハ八束穂あるより此ハ八握も右の例あり古事記天
御饗段ハ

獲百枝之稻
 云云其類

天之新巢之凝烟之八奉岳摩豆焼舉と有しか大方ハ長
 きを云ふより上ハ引る新古今集ハ神代より今日の為
 じハ八束穂ハ長田ハ稲ハ莫く初ハむと有しか長と云
 じ係ハ八握穂を云ふ者より古意を失ふ者
 其八束穂ハ並べて伊加志穂と云ハ八束ハ八握ハ
 穂ハ末ハ長き事を云ふより伊加志ハ其房目茂太
 大なる事を云稱あるより祈年祭詞ハ皇御孫命
 御世手長御世登堅磐尔常磐尔齋比奉茂御世尔幸
 向奉と有しか手長ハ足長ハ事茂ハ繁ハ榮田ハ事ハ
 右ハ八束穂ハ伊加志穂ハ相並べると同格より春日
 祭詞ハ足御世乃茂御世尔齋奉利云々天皇我朝廷尔
 伊加志夜久波敷能如久仕奉利佐加敷志末賜登云々

有ハ鈴屋大人説ニ茂弥木榮之云々たる如ク一平
 野祭又久度古南詞ナリ伊夜高^ル伊夜廣^ル伊賀志
 夜具波江能^ル如久立榮^之云々有リ弥高^之云々弥廣^之
 云々茂云ニ運ビ云々大殿祭詞ニ五十檀御
 世^ノ足良御世^ル田永能御世^止奉福^ル依^ル云々此
 ハ茂^之足^之長^之を合セ云々猶有^ル以^テ然^ル異^ル
 此^ノ事無^レハ引出^ズ此等^ノ例共^を合セ考^テ八束
 穂^ト伊加志穂^トハ經緯^ヲ長^ク大^ニ知^ルを云^フ事^を
 思明^クむ可^ク者^ニ云^フ有^ル上^ニ引^ク倭姫命世記
 千穂茂也^ト末^ハ百穂茂也^ト云^フ類^ハ未
 謂^ハる茂穂^ト云^フ物^ノ状^ハ云^フ知^ル可^ク○莫^ク然^ル

三ハ大和物語
 柳^ノ志奈比物
 手^ノ異^ハ長
 手^ノ亦^ハ此家
 不在^ル

ハ志那昆^ト訓^ス下^レ靡^ト穂^ノ實^ヲ満^ル時^ハ頃^ハ
 靡^ケル^ル其^ノ外^ハ花^ヲ葉^ヲ然^ル顔^ハ云^フ常^ニ
 云^フ事^ハ万^葉三^ニ真^木葉^乃之^奈布^勢能^山之^奴
 波^受而^十三^五春^山之^四名^比盛^而有^ル是^ナ有^ル
 又^十一^三十^八靡^合歡^木吾^者隱^不得^向無^念者^ト有^ル
 靡^を今^本ニ^那昆^久と^訓レ^ル下^ニ隱^ト云^フ新^ナル^ル
 ハ志^那夫^多可^ク事^右三^卷例^ニ推^在云^フ曉^ル
 可^ク云^フ催^馬樂^日柳^ノ枝^垂事^を志^奈比^云云^フ
 伊^勢物^語ニ^藤花^ノ志^那昆^三尺^六寸^許有^ル云^フ
 云^フ云^フ考^合可^ク通^証ニ^氏密^而靡^然之^訓義^文
 選^扶疎^又云^フ菅^家訓^志奈^布

給へる時、御心あり上は天照太神喜之曰云と有
り、其御喜の的然して違はざる事を御心は宜く所
思食し、あり万葉一十八山川之清河内跡御心字吉
野国之と有し山は覆しく水は清きを見行ハして御
心を宜く慰め御在し坐し、此の快の例あり此字
名義抄の心與斯と訓て鎮火祭詞の心惡と云事あり有
る其及ぶる者あり此文記傳に引られたるは甚快也
訓られたるは依て古史成文の甚快實矣と書られたるは
も共、僻事あり此は源氏物語もとも木立の覆ハ
るを愛で草花の彩ハるを賞する時この詞は心は宜

げは云ふを多く云ふが如く其唯は立る形状を賞
云ふ辞あり且は其秋虫類ハ握莫之然と有る其甚
熟く賞せられたるを云事上は章を遂て具に注せるが如
くふれは然らざる所ありける者を思ふ事
て相應するを快と云る及を不快と云る八洲起元章
は先以淡路洲為胞所不快云と有る是あり景行天
皇四年御紀第暖か言は毒性不欲交接之道今不勝皇
命之威納帷幕之中然意所不快と有る右は同ト但此
二の快字與呂許夫と訓り名義抄の快は與呂許夫
と有るは當然の訓あり者あり故快ハ喜の義は異ふ
くざるを
曉る可し
○口裏ハ口中あり名義抄の裏字の訓は字
良又字知と有り○合璽ハ麻由袁布と美氏と訓べし
本は如此古と訓られたるも非あり其ハ蠶の繭を作水

を口中に含み温め濡らしし縁口を取り抽出む為
あり今一ハ世中ニ此道大ニ開けて繭を釜中ニ煮て
其縁を繭車ホチロニ絡み取り事ハ有れども此ハ事ハ始
より有れれば口ニ含みたる縁を手ニ絡み取り許り
事より甚く簡易なり富音ハ状見えたり風神奈詞
ハ瑞籬御世ニ出来れば物々ニ比賣神ニ御服備金
能麻笥金能揣金能拵と見えれば己ニ其頃然る具
ニ至る迄ハ備ハれり者なりけり或説ニ上古質約
口裏含濡抽之今
猶民間有盆水漬繭繅之者ニ云々然れば上古にて
殊更ニ質約ハ物為るより有る者なり其自然成る
可き通ニ任じイヤタリ ○縁ハ帯より抽けば幾條
給へる者なり

よも別水出て一ニ寄聚し續きて縁と成れば其本
就て云稱ふ可し和訓栞ニ縁ハ五ノ義あり可し説
文註一蚕所吐爲忽糸五忽也云々予ハ説と似
たるあり神代ニ然る事後世ニ云々漢人の説を思ひて拵ハ可くも非れ
ハ如何有む和名抄ニ縁和名伊度蠶所吐也説文縁訓
伊度須知縁綉也類伊度乃布之縁節也と有り右義抄
ニ縁を
伊登又與流又美知又袁又久美と有り縁ヨシと縁
と縁と組と云意を兼たり又糸字ニ都其又都
良奴と ○抽ハ比久と訓ハ一各義抄ニ抽を奴久と
奴伎伊豆と訓て引出也と註されたり皇太神宮儀
式帳ニ生糸ノ事を明曳糸と有るも清く抽出たる謂

あり和名抄、獨重和名比岐萬由と有り爾を引て糸
 を取る由あり又中昔の歌詞、手引糸と詠る多し是
 らの古史徴、引れたるより、抽を都牟具と訓は
 り抽と油と同義の字なり其の惡く、非水とも
 猶比久の方此より勝る可し和名抄、紡豆無久續也
 と有り名義抄、抽を都牟岐又意富伊登又都具又奴
 伎豆と有り今も糸を引く事を都牟具と云事常より
 子華子、凡物之有所由者事之所以相因也理之所以
 相然也軸之軸車由是以相運也抽之抽絲由是以相屬
 也姓由之由族由是以有分也橋由之由味由是以有別
 也宇宙之宙理由是以有傳也糸之抽、穀由是以登也
 雲之油、而由是以降也憂、心有抽、心由是以動也左旋
 右抽、軍由是以止也故物之有所由者事之所以相因也

△古語拾遺集
 英鳴尊の御荒
 ひを云所不蠶
 織之源起於神
 代と所見なり

理之所以相然者也と有り抽と油とハ
 原同ト義を相有つ可き字にて有より ○養蠶ハ上 百
 十 註せらるが如く加比古と云時ハ其詞ハるる蠶
 の事と云を此ハ古賀比ト打込ト訓むハ其蠶を飼ふ
 職ト云稱るハ神名式ハ陸奥國會津郡磐梯養國神社有
 り又舊事紀成務天皇段ハ武養蠶命ト云見えたり
 共ハ此養蠶の事ト就ハる神名より人若より高天原
 より傳へて己ハ古ハ此業ハ盛ハ被行けし事を知ハ
 右ハ神社ハ若くハ此保食神ト御在ハ坐マシ觀跡
 聞老志ハ社南有川曰綿掛澤養蠶社在城下市店毎
 歲蠶事既畢分爾神効功以獻神 雄略天皇六年御紀ハ
 有り如何ハ旧社ト見由 天皇欲使后妃親桑以勸蠶事爰命螺贏聚國內蠶云々

有らば如く上古より后妃に雖も猶此事を物為させ
給へりしより況て天下に此事の盛なりし事ハ此又
国内の蠶を令聚給へりても灼然と者より仁賢天
皇八年御紀に是歲五穀登衍蠶桑善收遠近清平戸口
滋殖焉と有るに農^{ナリヒ}と桑^{コカヒ}とを並べさせ給へり農桑ハ
云事景
行天皇四十年御紀に出たり右の雄略天皇御紀より
ハ礼月令に季春之月后妃齋戒親東向桑以蠶事と
云事^{ハセ}と倣はせ
給へりしや
○道ハ物へ行くと其道路を傳ひて行
至るや如く何の業より各其物為へり方有る此を道
と云ふ即蠶を養むとしてハ先桑を殖え其葉を
蚕^{コキ}ハ蠶に養ひて繭を作ると云ふ至りて其麓^{コキ}をハ

綿^{ワタ}に造り精しきをハ繰^ウに抽きて其より 絁織^ウハ衣服
に成す其次第有るを云ふ如く保食神の御徳に始り
見ハれさせ御在り坐す時^{トキ}に當りて天照太神の然し
し其道を定めさせ給ひて天下に思頼を蒙るさせ給
ふ御事よりを麓略^{コキ}に思成し奉る可き事ハ備此養
蠶之道を始給へり事^{コト}の委しき状ハ神名秘抄に引る
機殿儀式に舊記に皇太神御座高天原之昔人面等
之遠祖天八千二姫殖桑桑於天香山以所蠶之而糸織
供進於太神と見えたり是より此より桑桑を先天香
山に令殖給へり事明らるより此の第二一書に此

保食神の事を推産靈神の事にして傳たるハ親子の
御間にて誤れる者も其ハ此神頭上生蟹與桑と
有て一時其物の成出たる趣あるハ寔ハ美たし傳
ふる事上百四十ニ下二己ニ委一く註せるハ如し然るを
の作者ハ此保食神と申すハ推産靈神の御子ニ御在
し坐す御事を得しハ知ずハ有けむ右の第ニ一書ハ
文を擧て蓋保食神歟と註ハ桑葉ハ養葉ハ可ハ蠶ハ
せるハ麓漏ふる事共ハ事ハ万葉十二ハ二十ハ桑子ハと云る是より和名抄蠶絲
具ハ桑柘和名上久波下都美蟹所食也と見えたる其柘ハ
桑ハ種類ハ一ハ葉を採て蟹ハ養ふ所由ニ依りて稱
ふる可ハ皇太神宮儀式帳御遷幸の所ハ阿向ヲ柘植

宮ニ令坐奉れり由ふるハ和名抄郷名ハ伊賀國阿拜
郡柘植と有る地名ふるハ若くハ其行宮ニ暫時して
も鎮奉る程ハ柘を植て養蟹ふハ爲つるハ因りて
可ハ万葉三卷ハ柘枝仙媛と云し見え歌ハ此暮
之枝羽裳又十ニ明來者柘ハ又此此向毛有益柘
之左枝ハ云くふるハ詠り天香山ハ高天原のあり大
和國ふるもハ亦ハ此山未降來ハすして天上ニ在ハ
程ハ事より此山の出來始ハ事傳十五ハ三ハ下ハ云り事ハ
状を思ふハ天宮ハ御垣ハ廻りして云計り近邊
ハ在る山ふるハ故ハ其便理ハ隨ひて令殖給へるハ
て有てハ天石窠隱ハ御時ハと云り此山ハ生出る所の種

ニの物を以て献物に充てらるる此ハ斬遏突智神の御
骸の天上に上りて成れる山より保食神より殊に親
しく御在り坐す所由より有れば此桑柘より限る
ず其神の成り給へる限の樹草共ハ先其山に就て播
殖させ給へりけむ事申すも更なり然るハ宝鏡出現
十猛命の初て天降り坐す時多ハ樹種を狩下りて
給へるハ天香山に殖生し給へる木共よりけむ事を
思ふ可儲此一書ハ上より往々云るが如く宝鏡南始
章に相應る可古傳よりハ故に此に以其稻種始殖
于天狭田及長田と有れば其に以天狭田長田為御田
と有り又此に始有養蚕之道と有れば彼に織神衣と

見^之て符合^{ヨリ}ハるに彼第三一書に天日鷲所作木綿と
有るを此に其文無く又古語拾遺に伐大峽小峽之材
而造瑞殿と有る峽ハ右に天香山とありあとも此
ハ其文無きハ唯大凡に語傳たりし故より然れば
と右に機殿儀式に殖桑桑於天香山と有る蚕に就て
云傳へたりし者も其ハ自餘に本草を其山に令殖給
へりけむ事推して知る然れば穀麻の類も同く保
食神の御身より成出た始て天香山に出来初たりし
者も之を明くむ可^也如此く文を互ひて照し應世相
を始終に心の行度より保食神の實に衣食位
の神に授け給へる御事を能く心得る人不多り

○舊事紀云此文を載たるは始有養蠶之道乃起
経織之業者也と有ハ養蠶と経織とを相對したる文
ありて諾々々々通田の古史徴より云れたる如
く當昔然る本の有を取れる者あり可し此経織之業
ハ即宝鏡南始章天照太神方織神衣居齋服殿と見
えたる是より其第一一書より推日女尊坐于齋服殿
織神之御衣と有ハ其神の上より引る機殿儀式より天
八千姫命の御在坐事其下より註せらる如し是
即世中の経織の業にも有ハ其起ハ天照太神の事始
め定させ御在坐事を明りの奉る可し證文より

此ハ究めて如此く無ハ得有まじき所なる者あり
又通と業とを對してハ事宝鏡出現章第六一書より
と併てを對したる経織ハ師の波多淤理と訓れたる宜
ろは合る者あり天孫降臨章第六一書より玉玲瓏織経之少女と云
事も見え姓の服部ハ波多淤理の切れたる事古説の如
く又神名式ハ筑前国宗像郡織幡神社大神と出万葉
十二下七夕歌共ハ相機之五百機立而織布之又三十
古織義之八多字又足玉母手珠毛由良尔織旗字公之
御衣尔織持堪可申あり其委ハ事ハ宝鏡南始
章に就て説ハ其齋服殿の下見る可し経織ハ常日
織姓と有ハ注ハ織経織繪布と云字を業ハ上より道
取れるあり此より何より云ふなり

天皇
神代
卷一

傳世一書の注
か如く其初天皇
耳公尊ハ縮穀
を主らせ給ひ
后神玉依姬命
ハ織姫の事を
所知食て天皇
の天下を御
才道の文本此
在り故是以て

の用ふり此を和邪と訓る其ハ職業を云稱ふり宗神
天皇十二年却紀ハ教化流行衆庶樂業ト有て下ニ始
校人民更科調彼此謂男之群調々之千末調也ト見え
仁賢天皇八年却紀ハ海内歸仁民安其業ト有て次ニ
五穀登衍蠶麥善收ト農ト桑トを兼り此を業ト云ふ
少又古語拾遺ト宜太玉命率諸伴神供奉其職如天上
儀ト見え又是以群神奉勅陪從天孫歷世相承各供其
職ト云ひ又是以中臣齋部二氏俱掌祠祀之職猿々君
氏供神樂之事自餘諸氏各有其職也ト有て職ハ固
より都加佐ト訓來る事ト云ふ又和邪ト訓て其義

云云鏡中始

ニ於て少クも異多ク所無キ者少ク然ルハ此ハ班織
之職ト書くこと亦違ハざる可シ此ハ舊事紀の文を拾ひて餘事を説く
所多ク故ニ和邪ト云事ハ解ニ逆ハ及バ○此一書
ガるより其公瑞璽盟約章所行の下ト云リ
ハ一ト衣食位ト始り一ト人民ト功業有る基ト事
己ニ追次ひテ説註せるが如ク備此物ト如此ト成
定れ多次第を云む其ハ八洲起元章第一一書ニ
ニ神降居彼嶋化作八尋之殿又化鑿天柱ト有り此時
未土木の功を費すト非ず一ト己ノ宮殿ヲ設成ル
又正書ニ因向陰神曰汝身有何成耶對曰云々ト有リ
此時始て男々の形體を具給ふ初ト有りト云

大御身を装束ひ隠させ給ふ御衣ハ御在し坐し不
レ若^{いか}裸體^み御在し坐せむヨハ然^{しか}御向對^{むかひ}の御
事^{こと}追^おふハ及^{およ}び給ふ事^{こと}思ふ可^{おも}く次日^{ふたつ}此第
六^む一書^{ひと}又飢時^う生兒^な號倉箱魂命^{くらばねたま}と有^あハ此保食神^{たも}を
二神^{ふた}の御子^{みこ}と為^なる^{なり}と其ハ誤^{あや}ふれど飢坐^う一御時
あ^あとハ食物^たの成來^なて其^{その}を同食^{どう}し^して有^あべ^べ斯^{しか}れ
ハ二大神^{ふた}の国生^{くに}の始^は己^{おの}の衣食^い任^にの御事^{みこと}ハ形^{かたち}の如
く成就^{なり}し^し者^{もの}なり然^{しか}れども此時^{このとき}草木^{くさく}を聚^あめ^めて宮
殿^{みや}を造^{つく}れ織^お経^のの事^{こと}有^あて御衣^みと成^なし農作^{のう}の事^{こと}を成^な
し^して御饌^みの奉^たる^{なり}水^{みづ}の事^{こと}固^{かた}まり^{なり}然^{しか}れ

ハ如何^{いか}の為^{ため}て^し其物^{そのもの}ハ成^なれ^{なり}と云^いハ其^{その}ふむ神^{かみ}と人^{ひと}
との界^かある^{なり}と如何^{いか}の為^{ため}て^し奇異^{きい}ある^{なり}御所作^み共^{とも}有^あ
て欲^ほふ任^にて出^い來^き成^なれ^{なり}の事^{こと}ありけ^し其^{その}ハ神代^{かみ}
世^よと成^なて^し猶^{なほ}神^{かみ}の御上^みに^にて^し帝^{みかど}の在^あて^し珍^{めづ}る^{なり}と
以^も事^{こと}あり^し其^{その}一^{ひと}事^{こと}を舉^あげ^し証^{あかし}し^し申^{まを}さ^しバ續^{つづ}後^{のち}紀^の日^ひ兼^あ和^わ
七年^{しちねん}九月^{くわがつ}癸^{みづ}巳^ひ伊^い豆^{まめ}国^{くに}言^{こと}賀^が茂^{しげ}郡^{ぐん}有^あ造^{つく}作^し嶋^{じま}名^な上^{かみ}津^つ嶋^{じま}此
島^{この}坐^ま河^か波^{なみ}神^{かみ}是^こ三^{さん}島^{しま}大^{おほ}社^{やしろ}本^{もと}后^{のち}也^{なり}又^{また}坐^ま物^{もの}忌^い奈^な乃^の命^{のみこと}即^{すなは}前^{まへ}
社^{やしろ}御^み子^こ神^{かみ}也^{なり}新^{あらた}作^{つく}宮^{みや}四^よ院^{いん}石^{いし}室^{むろ}二^{ふた}間^ま屋^や二^{ふた}間^ま窟^{くわ}室^{むろ}十^{じゅう}三^{さん}臺^{たい}
云^いハ其^{その}島^{しま}東^{あづま}北^{きた}角^{かく}有^あ新^{あらた}造^{つく}神^{かみ}院^{いん}其^{その}中^{なか}有^あ龕^{くわん}高^{たか}五^ご百^{ひゃく}許^{ほど}大^{おほ}基^{もと}
周^{しゅう}八^{はち}百^{ひゃく}許^{ほど}大^{おほ}其^{その}形^{かたち}如^{ごと}伏^ふ鉢^{ぼつ}東^{あづま}方^{かた}片^ぺ岸^{しづみ}有^あ階^{かゐ}四^よ重^{かさね}青^{あお}黄^き赤^{せき}白^{しろ}
黑^{くろ}沙^さ次^{つぎ}第^{だい}敷^{しき}之^の其^{その}上^{かみ}有^あ一^{ひと}角^{かく}室^{むろ}高^{たか}四^よ許^{ほど}大^{おほ}次^{つぎ}南^{みなみ}海^{うみ}邊^べ有^あ
一^{ひと}石^{いし}室^{むろ}各^{おの}長^{なが}十^{じゅう}許^{ほど}大^{おほ}廣^{ひろ}四^よ許^{ほど}大^{おほ}高^{たか}三^{さん}許^{ほど}大^{おほ}其^{その}裏^{うら}五^ご色^{いろ}稜^{りやう}石^{いし}
帝^{みかど}障^{さう}即^{すなは}有^あ美^み麗^{れい}瀆^{とく}以^も五^ご色^{いろ}沙^さ成^な修^{しゆ}次^{つぎ}南^{みなみ}傍^{わき}有^あ一^{ひと}磯^{いそ}如^{ごと}立^た岸^{しづみ}
軟^か障^{さう}即^{すなは}有^あ美^み麗^{れい}瀆^{とく}以^も五^ご色^{いろ}沙^さ成^な修^{しゆ}次^{つぎ}南^{みなみ}傍^{わき}有^あ一^{ひと}磯^{いそ}如^{ごと}立^た岸^{しづみ}
風^{かぜ}其^{その}色^{いろ}三^{さん}分^{ぶん}之^の二^{ふた}悉^{しつ}全^{ぜん}色^{いろ}矣^{なり}眩^{くら}曜^{やう}之^の状^{かたち}不^な可^な取^と記^き亦^{また}東^{あづま}南^{みなみ}
角^{かく}有^あ新^{あらた}造^{つく}院^{いん}周^{しゅう}垣^{かき}二^{ふた}重^{かさね}以^も壘^{らゐ}築^{つく}固^{かた}各^{おの}高^{たか}二^{ふた}許^{ほど}大^{おほ}廣^{ひろ}一^{ひと}許^{ほど}大^{おほ}
南^{みなみ}面^{めん}有^あ二^{ふた}門^{かど}其^{その}中^{なか}央^{ちゆう}有^あ一^{ひと}壘^{らゐ}周^{しゅう}六^{ろく}百^{ひゃく}許^{ほど}大^{おほ}高^{たか}五^ご百^{ひゃく}許^{ほど}大^{おほ}其^{その}

南片岸有十二圍室八臺南面四基西面四基周各十許
丈高十二許丈其上階東有屋一基瓦形葺造之長
十許丈廣四許丈高六許丈其壁以白石立周則南面有
二戶西方有一屋以黑瓦葺造之其壁塗赤土東面有
戶院裏磔砂皆悉金色又西北角有新作院周垣未究作
其中有一二盤基周八百許丈高六百許丈其體如龜伏南
片岸有階二重以白沙敷之其頂平覆也從北角至于未
申角長十二許里廣五許里皆悉成沙濱從戌亥角至于
丑寅角長八許里廣五許里同成沙濱此二院元是大海
又山岑有一院一門其頂如有人坐形石高十許丈右手
把劍左手持符其後有侍者跪瞻貴主其邊嵯峨不可通
達自餘雜物燦燦未止不能具注之有如掃之幾
凡人目之見也事有以之神御上之幾
許心斯事共之御在坐心之想像以奉之可
若火神土神成生御在坐其御子之稚産靈神
又其御子之保食神之次然御功之神等成出御在
坐人民小出来之隨衣食位之事人稍之出来始有之とら全く

遍く行直事み非少けく是を以て天照太神の
御命以て素戔鳴尊を大神使として天降遣ハして
保食神の消息を令看給へりけく此一書を見えた
る如く政ごりて報命し給へりけく皇太神甚怒坐て御
許を隔離けり令任給ひ天熊人をし再天降し給ひ
けり先素戔鳴尊の事有し時成出た少物共
を悉取て持參上りて献れ其時保食神を奉り
天上に致し奉りけり事上百三と奉りて証せり
如し是即天石座出の事起り又御天降の事始り傳
る所より是止事無事傳る有けり然る正書

二神ノ共ニ議給ヒテ吾己生大八洲國及山川草木
何不生天下之主者歟ト宣給ヒテ二柱ノ珍子を生成
ト奉ルセ給ヒテ其中ニ日神ハ自然ニ天地ニ照徹
ルセ御在リ坐す大布德坐ルセハ天上ニ送舉奉ルセ
給ヒテ唯素戔嗚尊不此天下ノ所知食ル御在リ坐す
きを二柱御祖神ノ共ニ御在リ坐シ向ムル宇宙ニ君
臨シ御行ハ御在リ坐スガ上ニ伊弉冉大神ノ根國
ニ罷坐シ後ハ一向ニ此國ニ就ルモト申サセ給ヒテ
故ニ伊弉諾大神ノ甚怒坐スガ勅許サセ御在リ坐
シ故ニ日神ニ相見奉ルモトトテ天上ニ參昇ルセ給

ヒテ御誓ノ御中ニ天忍穗耳等ハ成出御在リ坐シ後
ト素戔嗚尊御心天下ヲ所知者ト可ク御心ニ御在リ
坐スガ向リテ保食神ニ坐シ甚強顔ク御在リ坐シ者
夫レハ此書ヲ熟辨ヘテハ此一書ノ趣意備々ニ
得ルモ知テトクハ此ハ能ク思フ可ク又
己ノ註ニ如ク月夜見尊ト別神ト見テハ宝鏡開
始章ニ以テ天狹田長田為御田ト有リ新嘗國食すニ新
宮ノ事有リ神衣ヲ令織給フニ方ウテ齋服殿ニ居テ
御事有リ其即此一書ノ事ニ出テ其ニ全ク始ル
を云ふレハ今ノ状ニ衣食任ノ事ニ全ク整ヘテハ天
宮ニテ其時ノ事多ク然ラズ素戔嗚尊其御田ノ畔放

溝埤通放頻時串刺為給ひ齋服殿よてハ生剥逆剥為
給ひ新宮よてハ尿戸を為給ひて大板詞ヲ謂ゆる天
津罪ノ事を犯給へり此ハ所以有べし先日保
食神日御許日御使とて天降る世御在し坐し時其
口より吐出たる物を以て祈理ゆり御饗奉るし
ハ其無禮げなるを罰め坐し御心より其如く復命し
給へり却りて汝ハ惡神ゆりて宣ひて皇太神日御
許を退去る世御在し坐し置乍ハ其神日身より成
水ノ物を以て是物者則顯見蒼生可食而活之也ふ
甚く實喜ハ世御在し坐し農作ノ事を起し給ひ養養

の業を始ふを為給へり御心行ず所思し
御荒ひ共ハ御在し坐し然るハ天照太神ハ天
忍穗耳尊を太子と成奉りて天下を所知し令坐奉る
むと所思食す故に顯見蒼生を御し道ヲ物為
世御在し坐し結構ハ有れども素戔鳴尊ハ
も同トく御子ふ初より宇宙日君臨す可し御心
まゝぬハ其無禮なり保食神を忌惡し給ふ一向
事ハ依りて先日誓勝給へり事ハ高せて然荒ひさせ
給へり者なり然るハ其時日御心ハ日神と同胞
然るハ其同胞日御在し坐し甚親し御中向なり
るが保食神を以て殊に重き奉る世給へる事を

姑忌之思あしき多可し儲大板詞々々右天津深
ハ人の産業を損ぬ衣食位日事を妨ぐるを以て深
心為る事己其講義より説くを此日故其御荒心を
て人宝鏡南始章に就て又証す可なり
爰愠り坐て日神ハ天石窟に入給ひ磐戸を用て出居
り御在し坐し々々諸神等其所に來會ひて其祈禱奉
水多時日事ハ紀記拾遺に所見て人の知れざる如し
然れども其表を知り裏に寔の幽淫を致有る事を人
ハ知らず有けり其ハ顯見蒼生を為る衣食位日事を
然るも勞つて御在し坐す素戔鳴尊の物毎に妨げ奉
るに給へるに依り石窟に入御し御事なれば其御心
を慰め出奉るむより右半途より一に事止たり衣

食位日事を成し整備て奉るに如しと衆神の心赴き
つる事と所見て天香山の真坂樹を搦下て上枝と中
枝より瓊と鏡とを取懸たるに下枝より青和幣白和
幣を取懸たり其和幣即和衣なり又古語拾遺に今手
置帆負彦狹知二神以天御量伐大峽小峽之材而造瑞
殿兼作御笠及矛盾と有る瑞殿即宮なり此二人先日
損ハ水ハ新宮又齋服殿日事ハ當りて其を償ひ奉れ
るに異なるに然るに其主と有る可き御食日事無
ハ右日三書共ニ傳漏されたりと雖も已百四ニ兩宮
儀式帳を引て証せし如くあれは此より其保食神

の奉る世給へる事有ける然れ其處水に衣
食住の道を起し顕見蒼^生の世も存在^し可き事を盡
し備へて皇太神の大御心を取奉れり出御^し
云日心を着て見ると時、實に事の状相符合の聞か
るも亦思ふ可き者なり但此ハ其古傳の餘韻を
説く者にして殊更なる
事の如くあり有れども古傳の趣を見れば彼より
此此より彼に攻む時、此に至りて必其實ハ如此
此下ハ得有す若て素戔嗚尊ハ其罪に依り高
天原よりして千座置戸の解除を責られ給ひ終り神速
に逐ハれ御在り坐り此顯國に天降る世御在り坐り
るに其解除の驗より宝劔出現章は吾心清く之と言

舉り給ひ又出雲風土記に吾御心者安平成詔に云事
見えたり斯れハ實に御心の清く平く成り世に
御在り坐り坐り其後の事なる可し宝鏡南始章
第三一書に於是素戔嗚尊白日神曰吾所以更昇來者
衆神處我以根國今當就公若不與所相見終不能忍離
故實以清心復上來耳云々吾以清心所生兒等亦奉於
姉己而還降焉と有る先ハ其生坐り時、物實を以て
詔別給ひ結ぶるが此即天忍穗耳尊を天津日彥と
定めて天降り奉る世給へる事を約束し申させ給へ
るより此より國土の事、御功を立始させ給ふ御事

△の御事業、傳
 三三三、注せ
 十四、注せ
 が如く出雲神賀
 詞、此大神の御
 事、櫛御氣
 野命と申奉り
 て即上天より天
 降、うせ御在
 坐より、主張
 たる大御名、稱
 奉る事、身土
 毛を以て衣食
 位の資と成りて
 國土人民、幸
 給ふ事、此

と成り、故瑞珠盟約章第一一書、乃以日神所
 生三女神、降於筑紫洲、因教之曰、汝三神宜降居道中
 奉助天孫、而為天孫所祭也。有、其、對、不可、文、不
 可、天孫を助奉り、天孫曰、御為、所祭と詔給り
 神、即保食神、豊受大神の御事、思ふ
 可、者、此、師の古史、微、日、考、有、註、され
 小、云、一、如此、素戔嗚大神の御事、其、傳
 神を令齋奉給り、己、神心の清く、成り、御
 在、坐、上、其、亦、此、其、より、以來、素戔嗚大神
 顯見蒼生、為、物、給、り、其、より、以來、素戔嗚大神
 の、御所業、專、此、天下を經營、御在、坐、顯見蒼
 生、御恩頼を蒙、給、御事、耳、御心、故、

唯衣食位の事を國土人民、豊饒、在、世、むと、勞、り、世
 御在、坐、見、えて、其、后、神を奇稻田姬命と申奉り
 其、父母神を稻田宮主神と稱、給、り、皆、御營
 田の事、依、り、又、出雲風土記、飯石郡須佐郷
 神須佐能袁命詔、此、國者、雖、小、同、二、處、故、我、神、名、者、非、著
 本、石詔、而、即、已、命、之、神、魂、鎮、置、給、之、處、然、即、大、須、佐、田、小
 須、田、定、給、故、云、須、佐、即、有、正、倉、有、如、其、御、田、號
 させ給、り、以、稻穀を重、農作を主、為、させ
 御在、坐、御行を見奉、可、又、其、御子、大年神坐
 御年神若年神、御祖、坐、少年、田、寄、り、農作の

事之何れも功坐神等なる事上百四十一註るが如し
然るに保食神の御身より稻穀ハ成れりしうとも未
此国よてハ種蔕陪養の事をしり委しく知ざりし
ハ此神をいへ其保食神の御靈物を殖し給はむと神
量る世御在し坐し者ふむ有はる是即食物の件
ゆり天上有てハ謂
ゆり神を其及くよ此顯目よてハ其農作の事ハ在無
く尊功神の御在し坐し
御事を明くし奉る可なり又宝劔出現章第四一書ハ
是時素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅国云二初
五十猛神天降之時多將樹種而然不殖下韓地盡以持歸
遂始自筑紫凡大八洲国之内莫不播殖而成青山焉所

以稱五十猛命為有功之神即紀伊国所坐大神也と有
を屋材の始なり次ふ第五一書ハ素戔嗚尊曰韓郷
之島是有金銀若使吾兒所御之國不有浮室者未是佳
也乃拔鬚鬣散之即成秋又拔散胸毛是成檜尾毛是成
掖眉毛是成椽樟已而定其當用乃稱之曰秋及椽樟此
而樹者可以為浮室檜可以為瑞宮之材掖可以為顯見
蒼生與津彙戸卧之具夫須噉八十木種皆能播生于時
素戔嗚尊之子號曰五十猛命妹大屋津姬命次扒津姬
命凡此三神亦能分布木種即奉渡於紀伊国也と有
其同傳の事ハと鹿とあり此吾兒と有ハ其天

△其を具知名
素原と云有る
思合す可

忍穂耳尊の度々世給ひ瑞宮ハ其天皇尊の大宮の御
事あり此ハ天上より其新宮を穢し奉給ひしハ及
探さず御事ありて同く保食神の御功を天下に遍く
私給ひし者ありあり 其大神の御殿神の度々世給
想て屋船命と申し木と草との御功を分て屋船久々
遵命是木靈也屋船豊宇氣姫命是稻靈也と見え奥義
抄に古歌に牡丹草庭に繁し花の香を家除きて經
保食神と有る註に保食神ハ家神ありと有ると思
合す 其中に須叡八十木種の見えれば其播殖し
可し 青山成せる中より必桑柘も有る養蚕の道経織の業
をい必傳給ひし其梳津姫命の梳ハ又柘も通へる
を和名抄郡名に紀伊国伊都と有る縁も可く万葉

△打合ふ事共
少くはす

七十九より足代過而経鹿乃山と有る共は紀伊国の地
名あり水公思合と有るを宝鏡南始章第二二書に以
強為白和幣以湊為青和幣と有る為ハ化字の意にて
啗湊を爰て和幣也化し被具ハ被用たるあれハ穀
麻の種也其八十木種の中より收て将下り御在し坐
し事知てし出雲風土記に大原郡高麻山古老傳云神
須佐能袁命御子青幡佐草日古命是山上麻蔴初故云
高麻山即此山峰坐其御魂也と有る引合せて心得て
一又神名式に筑前国宗像郡織幡神社と有る織幡
神社ハ其別社と聞えたるハ此国より織経の事を

〇日暮書紀傳十四

〇二百三

始させ給へる由を以て祢奉水るを思ふ可し對馬
鳴上縣郡宗像神社式外にて三根郷佐賀村に神在し
坐す其社傳に神功皇后御凱陣の時八流の幡を
置て異國を降伏し宝祚を祈給ひ武内大臣螺塚を
取て放生し勝鬨の法を行はる此八流の神幡は筑紫
胸肩明神の織給へる幡より故に宗像明神と号し又
織幡宗像明神と号し又宗像八幡と号すと云ふ
中より如何なる事も無き事なり宗像大神の幡
を織り給へる事あり實を以て此に引らる又八幡
大神と申され其の依りし御名にて元々宗像大神と
祢奉りし御名より事瑞珠盟約章第三一書に就て云
ふ如此く衣食住の事は就て御心の残る所無く定め
振させ給ひ國引の神功共畢りて後其御子大國主
神は天下を經營り給へる御事を依り奉り給へる
不為の様より以て惱め艱苦の奉り給ひけるは御女

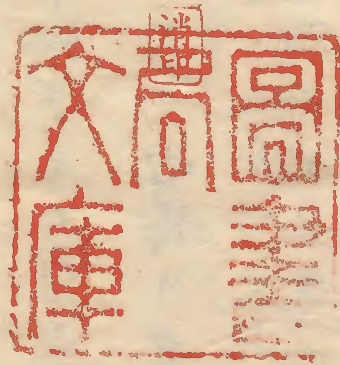
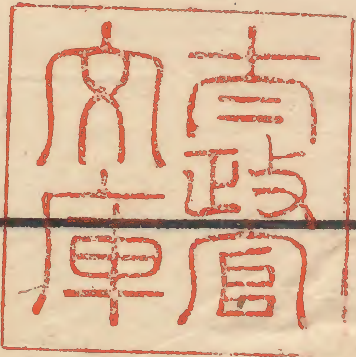
須勢理毘賣命の輔相奉給ふと云ふが云ふ其
事、^{シレバ}辟易し給へる舉動に給へるは此神と云ふ
所思し許させ御在し坐しむ於て心思愛而寝と有る其
間より逃出生させ御在し坐しむ追出生て遠望呼謂大
穴牟遲神曰其汝所持之生大刀生弓矢以而云々意禮
為大國主神亦為宇都志國玉神而其我之女須世理毘
賣為嫡妻云々と云事古事記に見えたるは如し宝劔
出現章に已而素戔鳴尊遂就於根國其有る此神讓
の御事有る後より可し若し根國に入御在し坐し
いし其國より和魂速佐須良比咩神を留めて終り御

空行く月圓に往坐て其大神と定まり大坐すすが故
此一書多し保食神の許に御使し給へる御名
を月夜見尊と傳はれし者あり 此月圓に渡りて神と共
在し坐て日神と共
此國土の晝夜を持分て守りて給ふ事ハ此大神の
御徳の極にありて日神と此神と二柱の珍子と坐
て皇御孫尊と此天下國土を持て天津日嗣の所由と係
る日神と共と承く遠く傳給ふ天津日嗣の所由と係
る者より跡略と思ひ 右の如く此國土より天上
成し奉る可事ハ非ず
より損害の御在し坐し衣食位の手を大に起させ給
ひて其保食神の御徳を弥廣^高く彌廣^高く殖^カはるせ奉給
へるが故に神名式に伊勢國度會郡度會宮四座 相殿
坐神
三座並大御在し坐を太神宮式度會宮所撰十六座の
月次新嘗

第一日月夜見社有て後宮號宣下有て月讀宮と申
す是より事傳十四百九 委しく註せらるが如く又出
羽國飽海郡大物忌神社 大神 一宮記に倉稻魂命と
見えて保食神と同神と度りて御在し坐を月山神社
大神と並給ひて共其稻倉岳の麓に鎮坐す右に
同し事上より已 四十一
三十一 註せらるをり考合す可し若て
此月夜見大神より可以治滄海原潮之八百重也と事
依り奉給へると其荒魂ハ海神と御在し坐を由傳
十三百五 十六下 云るか此日就て妙に奇しきハ世中に在
るし有ゆり萬の食物の味を調ふ事ハ皆其海鹽を

以て物為るは非水ハ出来ざる事此全く此大神ノ御
使為さ世御在し坐て其時ハ甚思ツカりし御所行して
ハ有ししとゞり保食神ノ御徳ハ其為ニ顯ハれと世御
坐し坐し事ニ思へハ思合ツカる程奇しく妙なる御事
あり又海潮を灌ぐ時ニ草木共ニ枯萎めを其草木
ノ中葉あり海潮を含めり物多るハ故又西戎あるとゞり
ハ草塩とて草を燒盡ししと塩を取て云事ハ有るハ
保食神ノ御力を合せ御在し坐し依る可く又諸ノ
水旗草木共ニ月ノ盈ミナカケ虚ニ依り氣ノ増減ナニトナ有る月夜見
尊其保食神をいし殊ニ親し奉りて御在し坐す

縁水者より世人穀物草木ノ類ハ唯日神ノ御照し
坐し依り出来り物と耳思ふハ眼前ニ然る事ハ有
水とゞり又月神も如此く御靈を幸ハハ御在し坐し御
事を知ざるハ唯夜を照す計り用有る耳ノ事ハ狭
く小く心得て其實ニ然る所以を知らざればあり
或書曰凡水族之物月望氣盈時即氣縮故月虚而魚腦
減月滿而蚌蛤實也又不獨水族矣草木百昌苟資湿润
以為生氣无不應月虧盈月滿氣滋月虚氣燥故上弦以
後下弦以前不宜伐竹與木以為材用是者易蠹生氣在
甲也下弦以後上弦以前伐而為材即不作蠹為少脂潤
空質而已亦猶春夏氣濕秋冬氣乾斧入時入之意也
云々如きハ今世傳て其驗有る事なるを此を神
代ノ本ニ及ぶしと探索ねざるハ甚く鹿漏るる事ハ
あり



右安政三年二月二十三日始三月二十三日成

